

Ratnāvalī の誓願二十頌について

津 田 明 雅

Nāgārjuna の著した *Ratnāvalī* (*RĀ*) の第5章には仏像や仏塔などの前で毎日3度唱えるべきものとして、20の偈頌が収められている。この部分のテキストに、チベット大蔵経に別出された次の2つがある。ともにテキスト中で *RĀ* からの抽出であることに触れられ、翻訳者には言及されない。本稿ではこれら別出されたテキストの異読の提示および記述内容の考察を行う。

Yan lag bdun pa'i cho ga tshigs su bcad pa ñi śu pa (*GVs*, P no.5428)

* *Saptāṅgavidhi-gāthāvimśaka*, 『七支儀軌二十頌』 (= *RĀ* V-65-87)

Mon lam tshigs su bcad pa ñi śu pa (*GVp*, P no.5928)

* *Prañidhāna-gāthāvimśaka*, 『誓願二十頌』 (= *RĀ* V-65-86)

RĀ V-65-87¹⁾ のうち、Skt. は V-78d-87 が存在する。漢訳は真諦による『宝行王正論』(大正1656)があり、全偈頌存在する。漢訳はチベット訳およびSkt. に意味的にほとんど一致しているが、V-84のみ倍の5字8句で翻訳されている。

両テキストおよび *RĀ* 中のテキストはほぼ一致するが、わずかに異なる部分もある²⁾。それらを次表に示す。これらのうち、V-68aでは文脈的に bdag ni の方が適切である。V-78bは漢訳の「善」にも支持される dge ba の方が意味的に望ましいであろう。V-84bは、*GVs* の読みでは a 句とほぼ同義となり意味的に適切でなく、漢訳にも支持される *GVp* や *RĀ* Tib. の読みを採るべきであろう。このように *GVs* にはわずかながらテキストの混乱が伺え、*GVp* の方が *RĀ* Tib. および Skt. (一部) によく一致しており、テキストとしては整っている。

また Tsoni kha pa の *sTobs bzi bsags pa byed tshul*³⁾ (P no.6084) にも *RĀ* V-69-85 が引用される⁴⁾。その異読を次に示す。(())は *GVs* の読み V-73a: ldan pa (bzai ba), -73c: lta (bta), -73d: chen (can), -74d: cher (che), -78a: gyi bsam pa dan (yid re ba yi), -78b: dge ba (bsam pa), -79b: 'jigs pas skyo ba de ('jigs pas skye bo de), -82a: na (la), -82d: bzlog (zlog), -83d: gegs (dpag), -84b: bdag la de dag (de dag la bdag) (*異読は -83d: gegs K, Z, Sk / gogs P のみ) 全体としてみれば基準となる *RĀ* や *GVp* とはほぼ一致している。V-78a の gyi bsam pa dan は他

の3者とは異なるが、ab 句でみたとき *GVp* や *RĀ* に近い。ab: *bsam pa dan // dge ba* は *GVp* や *RĀ* では *yid re ba yi // dge ba* であり、Skt. としては **āsā-kūsala* のような複合語が予想される。一方これは *GVs* の *yid re ba yi // bsam pa* とは異なる。V-83d の *gegs* は *gegs pa* の名詞形 (採用した読み *dgag* は *gegs pa* の未来形) であるから、読みとして可能である。

	<i>GVs</i> (P no.5428)	<i>GVp</i> (P no.5928)	<i>RĀ</i> Tib.
V-65b -65d	du'an ñin re bzin ni	du'an ñin gcig bzin yan	yan ñin gcig bzin yan
-66a	dam chos	dam chos	chos dan
-68a	bdag gi	bdag ni	bdag ni
-73a	bzan ba	ldan pa	ldan pa
-74c	gzol ba dan	gzol bar byed	gzol ba dan
-78b	bsam pa	dge ba	dge ba
-79b	j'igs pas skye bo de	j'igs pas skyo ba de	j'igs pas skyo ba nams
-80b	skye bo nams	skye bo kun	skye bo nams
-82a	la	na	na
-83d	dpag med	dgag med	dgag med
-84b	de dag la bdag	bdag la de dag	bdag las de dag
-86a	de skad	de skad	de ltar
-86d	kham su 'an	kham su	kham su
-87c	med pa	—	med la

(* 太字は採用した読み、78d-87には Skt. あり)

内容を見ると、*RĀ* V-65 で次の20偈を仏塔などの前で毎日3度唱えるように述べられた後に、V-66-85 がくる。これら20偈は2つに分かれ、V-66-69 ではいわゆる「七支儀軌」といわれる懺悔の次第、V-70-85 では菩薩の誓願が説かれる。V-86 ではその福德が説かれ、V-87 では以上が世尊によって説かれたと述べられる。2つのチベット訳のタイトルのうち『七支儀軌二十頌』の「七支儀軌」とはV-66-69の内容に、『誓願二十頌』の「誓願」はV-70-85の内容にあたる。

ここで扱う *RĀ* V-65-87 は『菩提資糧論』(BS)⁵⁾ に類似した記述がある。特に *RĀ* V-69 と BS 55, *RĀ* V-86 と BS 59 (瓜生津氏が指摘⁶⁾) はほぼ一致しているといえる。また、七支儀軌を扱う V-66-69 は BS 50-57 と内容的に類似する点が多い。周知の通り BS 50-59 は『十住毘婆沙論』(*DV*) の偈頌部分ともよく一致する⁷⁾。次はそうした偈頌の対照表である。

<i>BS</i>	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59
<i>RĀ</i> V	(67)	(68)	(68)	—	(67)	69	(67,68)	(67)	(65)	86
<i>DV</i>	p.45a24-29	c21-22	c23-24	46a23-24	a25-26	b9-10	c14-15	c16-17	47b7-8	b15-16

* () の数字は一部共通する内容をもつ偈頌の番号。

「七支儀軌」に関しては白寄氏の分類があり、*RĀ* では次の7つだという⁸⁾。

1. 帰依 (skyabs mchis, * śaraṇagamana)
2. 供養 (mchod, * pūjana)
3. 礼拝 (phyag 'tshal, * vandana)
4. 罪懺懺悔 (懺悔) (sdiḡ pa las ni ldog bgyid, * pāpadeśana)
5. 随喜 (ñjes su yi ran, * anumodanā)
6. 勧請 (gsol, * yācana; 筆者注: 請転法輪と請住世を含む)
7. 発菩提心 (回向) (byaṅ chub sems ldan, * bodhicittotpāda)

これら七支に関連する個所を *BS* や *DV* と比較してみると、次のようになる。

RĀ V-67 では「悪事に背を向け」という懺悔と「すべての人々の福德のすべてに歓喜します」という随喜の2点がみられるが、懺悔が *BS* 50, 56, 57 にそれぞれ「陳説我不善」、「悔過」、「説悔我罪惡」とあり、随喜が *BS* 54, 56, 57 でそれぞれ「聖人及凡夫、…、所有積聚福、我皆生随喜」、「随喜福」、「随喜福」とある。*RĀ* V-68 の仏に転法輪を請う点と世にとどまることを願う点が、*BS* 51, 52 にそれぞれ「我請転法輪」、「勧請住」とある。*BS* 56 にも「勧請」の語がある。*RĀ* V-69 では発菩提心が説かれるが、この偈は *BS* 55 と一致する。まとめると、両者 (および *BS* とよく一致する *DV*) では懺悔、随喜、勧請 (請転法輪と請住世)、発菩提心に関して共通した記述がみられる。これらは「四悔」といわれる⁹⁾。

帰依、供養、礼拝に関しては、*BS* ではわずかに第1偈に「合掌而頂敬」(p.517b11)、第164, 165 偈 (p.540c15-16, c23-24) に「供養」の語があるが、これらが四悔と関連付けられているとはいえない。*DV* では四悔を説く部分とその直前に「礼、合掌礼、稽首礼、頭面礼、帰命、合掌恭敬心」(pp.42a16-c7, 43a13-44c5, 45c24, 47b8) や「供養」(pp.43b13, b17, 44b25) の語があり、七支の要素が含まれているといえるが、帰依、供養、礼拝の3つが明確に区別されているとはいえない。

また七支の順序に関しても、*BS* と *DV* のいずれも *RĀ* の順序とは異なる。*BS* ではまとまっているのは4支のみであるが懺悔、勧請、随喜、発菩提心の順である。すなわち第50-55偈にかけて懺悔(50)、請転法輪(51)、請住世(52)、随喜(53-54)、発菩提心(55)が説かれ、第56, 57 偈でそれらがまとめられて「悔過、勧請、随喜、回向菩提」(56)、「説悔我罪惡、請仏、随喜、回向菩提」(57)とされる。*DV* では阿弥陀仏などの諸仏に「礼拝、合掌、帰命、供養」等を行うという記述の後に、*BS* に一致する記述が続く。ここでも懺悔、勧請、随喜、回向の順は確認できるが、帰依、供養、礼拝の順は意識されているとはいえない。このように *BS* と *DV* では7つの順序が確立しているとはいえず、作者が七支を意識してい

た可能性は低いといえよう。白崙氏によれば文献上で「七支」の呼称が確認できるのは7世紀以降であり¹⁰⁾、それ以前はむしろこうした四悔とか、懺悔、隨喜、勸請の三品として広く知られていたようである。

四悔の順序が異なっている点は注目され、*RA*にみられる四悔「懺悔、隨喜、勸請、回向」は、静谷氏の発達順とする分類¹¹⁾によれば、第2番目の『菩薩藏經』(大正1491)や『大乘三聚懺悔經』(大正1493)などのそれと共通しており、*BS*と*DV*の四悔「懺悔、勸請、隨喜、回向」は第4番目の『大乘集菩薩學論』(大正1636)のものと同通している。四悔の「順序の変った理由は不明」¹²⁾とされる。

興味深いことに、*DV*の散文部分には『三支經』という經典からの引用¹³⁾がある。この引用部分は、『菩薩藏經』あるいは『大乘三聚懺悔經』に、完全には一致しないけれど、同様の記述¹⁴⁾がみられ、これらがその『三支經』に相当するといわれる¹⁵⁾。さらに、*DV*にはこれら2經からと思われる引用が他に3箇所あり¹⁶⁾、したがってこの『三支經』はこれら2經のテキストと同系統のものであるといえるのである。しかしながら、*DV*では偈頌、散文いずれにおいても、『菩薩藏經』や『大乘三聚懺悔經』とは順序の異なる四悔が説かれる。*DV*の作者はなぜ四悔の順序を変えたのだろうか。あるいは後代の加筆があるのだろうか¹⁷⁾。ちなみに『大乘集菩薩學論』では、おそらく作者の言葉として「三聚者、謂懺悔勸請隨喜福等」(p.13066)とあるほか、「而說頌曰」として「又復若自他、同修於懺悔、勸請佛世尊、及隨喜福業」(p.144a22-23)とある。しかしながら、サンスクリットでは順序が異なり、ともに「懺悔、隨喜、勸請」¹⁸⁾である点には要注意である。管見の限り、「懺悔、勸請、隨喜」の順で説くテキスト¹⁹⁾はすべて中国で翻訳あるいは作成されたものであり、サンスクリットやチベット訳のテキストはない。静谷氏は「中国で用いられた4, 5の系統は、当初の姿からすれば、いささか異端の系統と言わざるをえない。」²⁰⁾と述べるが、もし三品をこの順とすることが中国で発生したのであるならば、そのことは*DV*と*BS*の著者問題に関して重大な影響をもつことになり、慎重な検討を要する。

1) 校訂本: Hahn, M. (1982) *Nāgārjuna's Ratnāvalī*, I, Bonn. 2) *GVs* は北京 (P), ナルタン (N), 金写 (S), *GVp* は P, デルゲ (D), N, チョネ (C), S の各版本で確認。

3) この著作にはタイトルがなく、ここでは白崙顯成 (1990) 「Jiānri の Bodhicittotpāda-samādānavidhi 研究 (1)」, 『神戸女子大学紀要文学部篇』(『神女文』), 23-1, p.42.3 に従った。4) *Ibid.* p.42.3-12. 本稿では P, タシルンボ (K, Kha219b4-220b5), ショル (Z, Kha184b4-185b3), クンブム (Sk, Kha220b5-222a1) の4版を使用。5) 偈頌番号は

拙著 (2006) 『Catuhstava とナーガールジュナ—諸著作の真偽性』, 博士論文, 京都大学, pp.418-420 のもの。 *BS* 50-59 は大1660, pp.530c4-531b6 の偈頌部分に相当。 6) 瓜生津隆真 (1985) 『ナーガールジュナ研究』, 春秋社, p.36.4-10. 7) 大野法道 (1932) 『菩提資糧論解題』, 『国訳一切經 論集部』, 5, 大東出版社, p.40 表, 瓜生津 (1981) 『龍樹における菩薩思想と戒』, 『戒律思想の研究』, 平楽寺書店, pp.109-110, 瓜生津 (1985) pp.34.10-36.6. 8) 白崙 (1990) pp.40.15-42.2. 七支儀軌の展開に関しては同稿に詳しい。 9) 瓜生津 (2004) 『龍樹』, 大法輪閣, pp.288.11-293.9. なお, *BS* と *DV* で「懺悔、勸請、隨喜、回向」の四悔が説かれる点は、すでに静谷正雄 (1970) 「三品經と舍利弗悔過經」, 『印度學仏教學研究』, 19-1, p.80. 上 9-12 で指摘されている。 10) 白崙 (1990) pp.38.34-39.20. 11) 静谷 (1970) pp.79 下 20-80. 上 15. 12) *ibid.* p.80 上 12. 13) 大1521, p.47b20-22.14) 大1491, p.1088c4-13; 大1493, pp.1093c26-1094a6. 15) 平川彰 (1990) 『初期大乘仏教の研究Ⅱ』, 春秋社, pp.116.4-117.3; 白崙 (1988) 「Jiānri の菩提過犯懺悔註菩薩學次第研究Ⅰ」, 『神女文』, 21-1, p.138.12-22. 16) 釈舎幸紀 (1968) 「十住毘婆沙論に引用される二つの所問經」, 『龍谷大学仏教文化研究所紀要』, 7, p.104 注 24: 1) *DV* p.45b18-cl9, 『菩薩藏經』 p.1087a23-b29, 『大乘三聚懺悔經』 pp.1091c11-1092b27; 2) p.46a13-21, p.1088b20-c2, p.1093b24-c20; 3) p.48b4-18, p.1087c3-16, p.1092b29-cl5. 17) 加筆者としてまず疑われるのは翻訳者の鳩摩羅什 (あるいは筆記者) であろうが、もしそうであれば彼は *DV* の特に「除業品」全体をかなり大幅に改竄した、ないし自ら著わしたことになる。一方で彼の訳による『大智度論』では *RA* と同じ順で三品を説く: 大1509, pp.110a2-10, 495b9-11. また *BS* との関係も考慮する必要がある。 *DV* は *BS* を数度にわたって引用 (ハカ広喜 (1992) 「『十住毘婆沙論』と『菩提資糧論』」, 『印度哲學仏教學』, 7, p.133 表) するため, *BS* は *DV* に先行する可能性がある。 18) Bendall, C. (1902) *Sikhsāsamuccaya*, St.Petersbourg, pp.290.2, 361.1-3. チベット訳もこれに一致する: P no.5336, Kīl85b1-2, 223b5 (D no.3940, Kīl159a4-5, 193a3-4) 19) 静谷 (1970) p.80 上 9-15 の4本のほか, 『菩薩五法懺悔文』 (大1504) でもこの順で五悔が説かれる。梶谷憲昭氏 (同 (1992) 「悪業払拭の儀式関連経典雑考 (1)」, 『駒澤大学仏教學部研究紀要』, 50, p.22 注 2) が指摘する『金光明經』と関連テキストにもこちらの系譜に含まれるものがある。次の個所に先の順で四悔あるいは五悔が説かれる: 『合部金光明經』 (大664) p.369b12-15, 『金光明最勝王經』 (大665) pp.41c28-415a3, 416a8-9, 19; 『金光明經疏』 (大1787) pp.161b2, 163b11-12. ただし『合部金光明經』 p.370c5-6 では懺悔、隨喜、勸請の順となっているし、最古訳の『金光明經』 (大663) では懺悔は説かれるが四悔としてまとめたものは確認できない。 20) 静谷 (1970) p.80 下 2-3.

(キーワード) Nāgārjuna, Ratnāvalī, 『菩提資糧論』, 『十住毘婆沙論』, 三品, 四悔 (京都大学非常勤講師, 博士 (文学))